

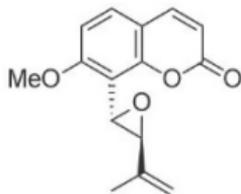
23T-pm05S

*Murraya paniculata*等からの細胞毒性成分探索

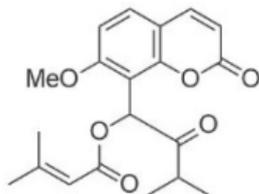
○戸次 雄一¹, 荒井 緑¹, 野崎 はるか¹, 原 康雅¹,
小谷野 喬², Thaworn KOWITHAYAKORN³, Samir K SADHU⁴, Firoj AHMED⁵,
石橋 正己¹ (¹千葉大院薬, ²テムコ, ³コンケン大, ⁴クルナ大, ⁵ダッカ大)

【目的】近年、製薬会社や大学等の研究室では独自の化合物ライブラリーを保有し、そこから特定の薬効や活性を示す化合物を探し出しており、化合物ライブラリーの構築は新規医薬品の迅速な開発につながるといえる。本研究では、ヒト胃がん細胞株である AGS 細胞株へ強い毒性を示したタイ産植物 *Murraya paniculata* (ミカン科) 等からの成分探索を行った。

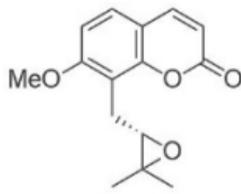
【方法・結果】当研究室保有の植物エキスイブラリーからヒト胃がん (AGS) 細胞株へ強い毒性を示したエキスを 10 種選定し、TLC を用いたスクリーニングにより、まずタイ産植物 *Murraya paniculata* を分画対象とした。本植物葉部の MeOH 抽出物を液-液分配、各種カラムクロマトグラフィー、HPLC を用いて分画し、10 種のクマリン型化合物 (1-10) を単離した。各化合物を各種細胞シグナルアッセイで活性評価したところ、3 種 (1-3) について種々のがん細胞にて異常亢進している Wnt シグナル阻害作用を見出した (IC₅₀ 1: 2.90 μM, 2: 24.0 μM, 3: 74.2 μM)。現在、他の細胞シグナル系の活性評価およびバングラデシュ産 *Acacia mangium* (マメ科) の分画を進めている。



phebalosin (1)



murpaniculol senecioate (2)



meranzin (3)